

グラスゴー・コピーの書き込みの特徴

——*The Two Gentlemen of Verona* への書き込みの転写とともに——

住 本 規 子

【概要】

グラスゴー大学所蔵のファースト・フォリオには2カ所に所有者／読者の記名が残っている。*The Tempest* のタイトルページに書き込まれた“*Inchiquin*”という記名は古くから知られているが、最近発見された *The Two Gentlemen of Verona* の4幕2場の終わりに書き込まれた“*Lorenzo / Cary:*”という記名からフォークランド子爵家のフォリオであった可能性が指摘されるようになってきた。拙論「読者から読者へ」にひきつづき、書き込みの転写を共有するとともに、書き込み者の読みの特徴の解析を試みる。

はじめに

筆者は「読者から読者へ——書物のもうひとつの役割とグラスゴー大学所蔵ファースト・フォリオの書き込み——」でグラスゴー・コピー（West 11）の書き込みを初期読者から伝達された貴重な情報と位置づけ、まずは、*The Tempest* の書き込みの転写を発表した。その後、全ページに書き込みが残っている残りの2作品を含むインクで書き込まれたほぼ全ての書き込みの転写を果たしたところで、この初期読者の書き込みの特徴の分析を試みることにし、中間発表として第54回シェイクスピア学会にて発表を行った。¹

研究発表応募を学会に提出した後で、他の学会で再会したエマ・スミス氏より2016年刊行予定の氏の新著 *Shakespeare's First Folio: Four Centuries of an Iconic Book* からグラスゴー・コピーをあつかった部分を原稿で読む機会

1 小論の一部は第54回シェイクスピア学会（2015年10月10日 於北海道教育大学函館校）の研究発表第4室第2発表（司会 英知明氏）の発表原稿に基づきます。英氏およびフロアの方々からの有益なるフィードバックに感謝いたします。発表原稿はのちに山田昭廣氏がお読みくださり、大変ご示唆に富んだ批評をいただくことができました。期日の関係で今回はすべてを反映させることはできず、多くは今後の課題となりましたが、一部は小論に反映することができました。ここに感謝の意を表させていただきます。なお、小論に不備が残るとすれば、それは、すべて筆者の責任であることは言うまでもありません。

の提供を受けることになった。そこには、先行研究にあらたな展開を加える重要な考察が示されていた。フォークランド子爵家の書き込みをした読者を、Rasmussen & West の推す初代子爵ヘンリー・ケアリ (Henry Cary c.1575-1633) ではなく第2代子爵ルーシアス・ケアリ (Lucius Cary 1610-43) ではないかとほぼ特定したのである。スミスは、俳優リストの書き込みデータを Andrew Gurr の *The Shakespeare Company* を使って各俳優の活動時期から書き込みの年代を割り出すことで、父親世代では矛盾することを確認したのだ。

ルーシアスは記名を残したロレンゾ (Lorenzo 1613-41) の兄にあたる。1629 年、父親のアイランド総督としての任期終了でイングランドに戻ってきたとすれば 19 才と 16 才であった兄弟にとってシェイクスピア・フォリオは兄弟を最新のロンドン文化状況 (を代表する演劇文化状況) と (再) 接続するための格好の文化装置であったことだろうと、スミスは俳優リストの書き込みを読み解くようだ。弟のロレンゾはその後オックスフォード大学エクセター・コレジに学んだのちアイランドのイングランド軍に身を投じ 1641 年のアイランド反乱の鎮圧の最中に戦死している。(Maclean) これに対し兄のルーシアスは父親が在アイランド中にダブリンのトリニティ・コレジを卒業。帰国後は母方の祖父から相続したグレイト・ティュー (Great Tew, Oxfordshire) の館に居を構え、豊かな蔵書を蒐集構築かつ開放し、同館に集う文化人サークルの中心的存在として 1630 年代を穏やかに生きたのち、ピューリタン革命では国王チャールズ一世方につき 1643 年に戦死。内乱に心を痛め精神を病んだ末、銃弾の飛び交うなかにわざわざ身をさらしに出陣した自殺のような戦死であったという。(David Smith 440-44)

The Great Tew Circle と称されるグループの会合には、哲学者や神学者たちのほかフォリオ本を手にした肖像画で有名な詩人のサー・ジョン・サックリング (Sir John Suckling 1609-41) や劇作家で「ひとつの時代の人ではなくあらゆる時代の人」とシェイクスピアを賞賛する長い詩をフォリオに寄せたベン・ジョンソン (Ben Jonson c.1572-1637) も常連だったという (D. Smith 441)。そこではシェイクスピアが論じられることも多かったようだ。エマ・スミスはニコラス・ロウ (Nicholas Rowe 1674-1718) が 18 世紀最初のシェイクスピア編纂本につけた作家評伝のなかでルーシアスに言及していると指摘し、彼と彼のサークルのシェイクスピア賞賛を検証し、彼らが議論

の土台にしたのは一部がグラスゴー・コピーとして今に残るファースト・フォリオだったのではないかとしている。第二代フォークランド子爵の死後、グレイト・ティューの蔵書は売却されたという。たくさんの書き込みが行われ議論の度にひもとかれ大いに使い込まれたフォークランド子爵家のコピーが、製本が崩壊しかかったまま、その中に含まれていたとしたら、140年ほど後の1780年頃に第5代インチキン伯の蔵書に収まった頃には今とおなじ「寄せ集め」コピーの姿になっていたとしても不思議はない。(Lee 29)

現在の書き込み研究は、読者論や読書史の分野でいえば、D・ピアスン(David Pearson)の以下の引用に代表される考え方をよりどころとして行われている。

People do not need to be famous, or important, for their marginalia to be of interest; the notes of obscure or anonymous former readers can provide equally valuable testimony of the ways in which books were being absorbed or reacted to in the past. (Pearson 111)

読者がどのように本を受容したのかを記録する書き込みは、誰の書き込みであろうと、どれもすでに平等といってよい価値を帯びている、というわけだ。とはいえ、書き込み者が後世のシェイクスピア賞賛の先触れとして、シェイクスピア読みを持続可能な文化にしていくのに少なからず影響を与えたルーシアス・ケアリという青年貴族である可能性が高まったグラスゴー・コピーの書き込みは、読者論や読書史研究にとどまらない、かけがえのない貴重な文化資料として、慎重に研究され広く共有されなければなるまい。

スミスのルーシアス・ケアリ書き込み者説は、なによりも「俳優リストへの書き込みからは、この書き込み者が舞台での上演を観た経験を持つ人物であった可能性が、さらには、冒頭の三作品の末尾に書き込まれた・・・寸評からは、この人物が文学作品としての戯曲に対し一定の批評意識を有していた可能性が強く示唆される」(住本 35-36)とした拙論を強力に後押ししてくれるものであった。スミスの新説を取り込むかたちで発表の準備をしておいたことは言うまでもない。小論では、学会での司会者やフロアからのフィードバックに触発された考察を加えて、現段階で辿り着いた、より具体的な分

析結果を報告したい。同時に、書き込みのあるオリジナルページがほぼ全部残っているあと2作品のうち紙幅の関係で *The Two Gentlemen of Verona* の書き込みを共有しておくこととする。

作品評を残す読者

グラスゴー・コピーが「寄せ集めコピー」であることは前稿でも述べたが、ここでは、詳細を追記しておく。書き込みが残されているページは特定のサイズのページに限られ、欠損を補ったのであろう異なるサイズのものには同様の書き込みは見られない。サイズは高さのみ記すと、筆者の計測によれば、330、328、326、325、318、317（単位ミリ）の6種類確認された。このうち本研究で対象とする書き込みは325ミリのところのみ現れる。前付けから初めの3篇の喜劇で325ミリ・サイズのページ、この範囲でも別サイズが若干混じるが別サイズには書き込みが現れることはない。そのあとの喜劇では、*Much Ado about Nothing* の最終ページとその裏の *Love's Labour's Lost* のタイトルページ、*As You Like It* と *A Midsummer Night's Dream* の書き込みのあるページで、それ以外ではたとえ、325ミリであっても同一人物の手になると思われる書き込みは見られない。同じサイズであっても、もともとおなじコピーにあったページかどうかは今回の調査では確認できなかった。*All's Well That Ends Well*, *Twelfth Night*, *The Winter's Tale* にも325ミリ・サイズのページは存在する。歴史劇では *1,2,3 Henry VI*, *Richard III*, 悲劇では *Coriolanus*, *Romeo and Juliet*, *Timon of Athens*, *Julius Caesar*, *Lear*, *Othello*, *Antony and Cleopatra* にも存在するが、同様の書き込みが現れることはない。書き込みをした読者・所有者の代、つまり、散逸するまえの状態では、明星コピーのように、すべてのページに書き込みがされていたのだろうか。

この点についての示唆となりうる情報は、フォリオの目次にあたるページが与えてくれる。グラスゴー・コピーの「カタログ」(Sig. π A6) には同一読者によると考えて矛盾のない書き込みが見られる。具体的には、一部の作品タイトルに一重線もしくは二重線が下線として書き込まれているのである。一重線で下線を引かれたタイトルは、喜劇では、*The Tempest*, *The Merry Wives of Windsor*, *Measure for Measure*, *A Midsummer Night's Dream*,

The Merchant of Venice, *All is Well That Ends Well*, *Twelfth Night* の 7 作品である。*Much Ado about Nothing* と *As You Like It*、それに *The Winter's Tale* には二重線が引かれ、この読者の作品評価の度合いを物語っているように思われる。彼は、最終ページに作品寸評を書き入れることにしていた可能性があるが、書き込みのある最終ページをもつ喜劇 4 本にそれらが残された。各作品の読了ないしは観劇とカタログへの書き込みの後先は不明だが、残された寸評の内容は下線の選択に連動しているように思われる。“prety[sic] well;” と書かれた *The Tempest* と “very good; light;” とある *Merry Wives of Windsor* に一重線が引かれている一方、“starke naught;” と手厳しい評がよせられた *The Two Gentlemen of Verona* には下線が引かれていない。書き込みのあるページとしては最終ページのみ現存する *Much Ado about Nothing* には、判読が難しいものの、フランス語まじりの “bon fort bon: good”² と読める寸評が記されている。これは 4 本のなかでは最大級の賛辞であり、「カタログ」での二重線を裏付けているように見える。

現状のグラスゴー・コピーでは書き込みは全くと残されてはいない歴史劇と悲劇ではあるが、「カタログ」に残された下線が示唆するこの読者の評価ないしは好みは以下のとおりである。歴史劇では *Henry IV, Part 1* が二重線を、*Henry IV, Part 2* と *Henry VIII* が一重線をそれぞれ獲得している。悲劇では *Titus Andronicus* をのぞく全ての作品が下線を獲得、そのうち、*Julius Caesar* と *Hamlet* に二重線が引かれている。歴史劇や悲劇の部分もオリジナルな状態で残ってくれたらと考えるとため息をつくほかない。

ペンを片手に本を読むということ

J・ベイトはグラスゴー・コピーの読者の読書スタイルが当時の教養ある読者のそれと共通の特徴を示している、と以下のように指摘した。

The Glasgow copy with those intriguing notes scribbled against the list

2 筆者の試みの読み。Rasmussen & West では ‘[bon/Con]?Fort [...]? Good’ と記載。Bate や Smith (forthcoming) はこの書き込みには触れていない。山田昭廣氏は筆者の読みをおおむね是とされた。

of names of principal actors at the beginning of the book also has some brief annotations to the comedies: . . . There are underlinings of admired passages and the marginal annotation 'ap' (perhaps meaning approbo, 'I endorse this') to highlight on beauties and on points of particular moral value that might merit copying into a commonplace book, is concordant with the way in which early modern readers responded to classical texts and serious histories. (Bate 440-41, 下線筆者)

共感したパッセージに下線を引いて残す（あるいは、さらに別のコンプレイスブックに書き写す）という作業をしながら、つまりペンを持ちながら、テキストを読むという読書スタイルは書き込みのあるページを見ると実に納得される、実際にそうであったのだろうと想像できる行動である。Adam Hooks もまた、

The presence of marginalia . . . reveals that reading was an interactive process in which writing was not simply consumed, but also produced. As crucial material evidence of the intellectual and practical responses of readers, marginalia have become central to Renaissance studies, showing how readers understood and used the texts they encountered. (Hooks 636)

と述べているように、一般論としては初期近代読者の読書スタイルとしてひとつにくることが可能だ。しかし、具体的に共感を覚え下線を引いたパッセージをひとつひとつ検討していくと一般論ではないひとりひとりの読者の個性に肉薄することになるのではないだろうか。小論では、もう1人の初期読者である明星大学所蔵のファースト・フォリオ MR774 (West 201) の読者が下線（実際はすべて上線）³を引いたパッセージと比較することで、この可能性の追求を試みる。

グラスゴー・コピーに見る初期読者の書き込み——明星コピーと比較して

グラスゴー・コピーで書き込みのある巻頭の3作品、*The Tempest*、*The Two*

3 明星リーダーの下線（上線）は「読者反応の強さを表現している」（山田 2013, 183）。

Gentlemen of Verona、*The Merry Wives of Windsor* は、明星コピーの読者の場合、書き込み密度の最も低い（最下位からそれぞれ7、2、1位）作品たちだ（Yamada xxviii）。それでもグラスゴー・リーダーにくらべるとはるかにたくさんの下線と欄外の書き込みを残している。グラスゴー・リーダーは明星リーダーより下線をひく箇所をより厳選している、とまずは言えよう。かなりの確立でグラスゴー・リーダーが下線をひいた箇所は明星リーダーもまた引いている。明星リーダーの場合は下線に長短2種あって、ショートラインであってもラインはラインと見なしてよいのかといった問題は残るが、その点を加味しながらここでは、明星リーダーが下線を引いていないところでグラスゴー・リーダーが下線を引いている箇所に注目してみることにした。すると、以下8つの特徴が浮かび上がってきた。

(1) 「俳優リスト」と「カタログ」への書き込み

前附け部分で俳優リストと目次（カタログ）ページに反応を残していることが上げられる。明星リーダーはこれらのページには彼にしては例外的になんら手を加えていない。

俳優リストの書き込みからは書き込みの年代を推し量ることができる、とスミスは指摘する。詳細は公刊されたあかつきの同書に譲るとして、リストに아가っている26名中“by eyewitness”とメモ書きされている John Lowine と“know”とメモされた Joseph Taylor および Robert Benfield の3人以外は1629年から30年代にはすでに亡くなるか、劇団を去るかしているので、書き込みの年代も30年代と推測される、というのだ。スミスは言及していないが、年代もさることながら、二重線、一重線、下線なしと、区別しているところにも注目しておきたい。これらの区別はやはり書き込み者にとっての、なんらかの重要度を表しているのではないだろうか。往年のメンバーでは Shakespeare⁴、Burbage、Slye に、現役では Taylor に二重線が引かれ、一重線は Lowine と Benfield という2名の現役と、往年のメンバーでは Ostler、Field、Underwood、Tooley、Ecclestone の5名に引かれてい

4 Shakespeare の名の下書き込みを山田氏は“a least for making”が正しい読みであると指摘し、その意味は「a least part for making a play on stage」つまり「not one of 'the Principall Actors'」なのではないかとの解釈を示されたが、先行研究にはない説得力ある明快な解釈である。

る。下線なしは15名にのぼる。喜劇役者 William Kemp や Robert Armin が無視されているところに人気稼業のはかなさを、Hemings と Condell は当のファースト・フォリオ出版の立役者なのに同じく無視されているところに、「本職」重視の書き込み者にはその重要度が見えていないことを確認しておこう。

アンドルー・ガーは *Playgoing in Shakespeare's London* で1567年から1642年に至る観客情報を収集している。そこには、ケアリ家から母親のエリザベスとともにルーシアスの情報が含まれている。特にルーシアスについては、以下の引用が資料としてあげられている。

“at the Blackfriars, prob. in 1630 or 1631”; Asking for a copy [of a playbook] on the grounds that ‘if I valued it so high at the single hearing, when myne eares could not catch half the words, what must I do now, in the reading when I may pause upon it’ (Kurt Weber, *Lucius Cary*, 1940, p.63 quoted Gurr 226-27)

彼にとって“words”すなわち芝居のセリフ、聞いただけでは半分も聞き取れないがその素晴らしさには感じ入っているセリフを、聞き漏らしてしまったセリフも含めすべてゆっくり鑑賞したい、これが大事だったのであろう。フォリオにまとめたのがだれであるかなどは関心の埒外だった。ガーが蒐集した観劇記録とグラスゴー・コピーへの書き込みとは相まって当時の戯曲の出版事情を物語る貴重な資料となっていることがわかる。

「カタログ」への書き込みについてはすでに触れたのでここでは省く。

(2) 作品評価

4 作品に書き込まれた最終ページの作品寸評についてもすでに触れたのでここでは *Much Ado about Nothing* の寸評についてのみ補足的に触れておく。“bon fort bon: good”と読めるこの書き込みは太くて力強い筆はこびで書かれている。(図1参照) アラゴン大公とおれ、おまえ (thou) で呼び合う仲の Benedick の、アラゴン大公じきじきの発案になるキューピッド作戦にまんまとひっかけてくれたお礼とばかり、「弟君のお仕置きはあしたい作戦

をご伝授しますから」とはしゃぐ台詞で幕となるこのお芝居に喝采する様子
がこの筆はこびに表れているように思う。

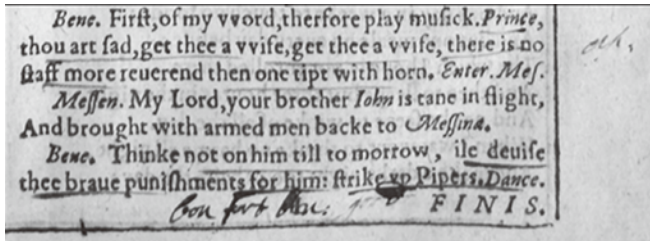


図1 Sp Coll BD8-b.1, sig. L1r (By permission of University of Glasgow Library, Special Collections 撮影筆者)

明星リーダーにはグラスゴー・リーダーのようなトータルな作品評は見られないが、“good epilogue” (S2 *As You Like It*) などが例外的に書き込まれている。一方、グラスゴー・リーダーにもおなじようにピンポイントでの批評眼を見せることもある。“a good iealous mans dilemma” (D5r *Wives* 図2) がそれだ。

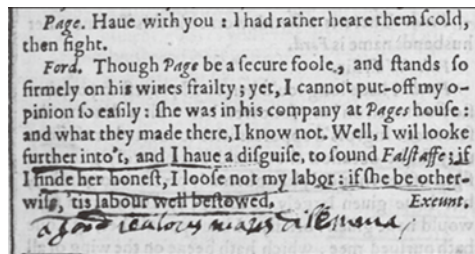


図2 Sp Coll BD8-b.1, sig. D5r (By permission of University of Glasgow Library, Special Collections 撮影筆者)

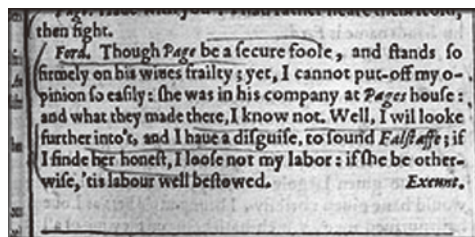


図3 MR774, sig. D5r (明星大学図書館所蔵)

図3は明星コピーからの同じ部分の画像である。オハイオ州立大学教授アラン・ファーマー (Alan Farmer) は、“Reading the First Folio Then and Now”と題するワークショップで明星リーダーは *Merry Wives of Windsor* を誤読しているのではないかと指摘した。“wives”が“merry”でしかも“honest”であるなどということとはあり得ない、というジェンダー・バイアスにとらわれるあまりこのお芝居の女性たち発案の作戦プロットについていけない、というのだ。⁵ ファーマーの指摘を参考にしつつ、もう少しこのセリフに対してふたりの読者がどのような反応を示しているかを下線の弾き方で比べてみよう。

下線だけで比べるなら図2と図3にあるように、明星リーダーもグラスゴー・リーダーも同じ下3行に下線(上線)を施していることがわかる。明星リーダーが反応したのははじめの2行、Pageに関する言及、にはグラスゴー・リーダーは反応していない。明星リーダーはPageのうかつさの指摘、妻は見張らなければいけない存在だというFordのジェンダー観を共有したといえるかもしれない。そこを無反応でやりすごしたグラスゴー・リーダーには、明星リーダーが示したほどの共感を覚えなかったと解釈されよう。それより、“good iealous mans dilemma”という書き込みがあることで、Fordの台詞を、さらにはそれが示唆するプロットの展開の方をおもしろがる反応がはっきり伝わってくるように思われる。

(3) 本文校訂

校訂というものを明星リーダーはほとんどしていない。*Hamlet* で一カ所例外的に観察されるが、インクも筆跡も別人のものではないと思われる(Yamada 240)。これに対しグラスゴー・リーダーは少なくとも *Wives* で代名詞の変更ばかり3カ所実行している。一は、“We three to hear it, & end it between them” (D2v TLN 133) の“them”を“us”に変える校訂である。この修正は納めるべき対立関係が「かれら」としている原文を「われわれ」に変更するものである。校訂(emendation)はより積極的なテキストとの交渉である。グラスゴー・リーダーは *Wives* ではことのほか積極的に読み込んで

5 Farmer, “‘Whoores subtil shifts’: Commonplacing Women in the Meisei Copy of the Shakespeare First Folio” (private circulation).

いるのかもしれない。1638年には上演記録があるので、実際の舞台を観たことがその原動力になっている可能性は考えられる (Kawachi 232)。二は “Heauen make you better then your thoughts” (E2r TLN 1533) の “you” を “me” とする変更。これは、やがて 18 世紀の編纂者 Edward Capell も採用した読みである。三は “What, haue scap'd Loue-letters in the / Holly-day-time of my beauty, and am I now a subiect for them?” (D4r TLN 555) で主語の I を補い、“haue I scap'd. . .” と読ませる修正である。三の変更は 1630 年に出版された Q3 にあり、1632 年の F2 はじめ、現代まで受け継がれている。

Wives には若干プロットのわかりにくさ、追いにくさが、明星リーダーにとってだけでなく、グラスゴー・リーダーにも感じられる瞬間があって、一や二ではとっさにこのような代名詞の修正を書き込みたくなったのだ、という解釈もできるのではないだろうか。いずれにせよ、1630 年代に書き込みを行っていた人物にこのような校訂志向が見られることは、歴史的に重要なことである。

(4) 私的検閲？

図 4 は校訂というより何らかの私的検閲を思わせるユニークな事例である。Robin Hood への言及がどのような「検閲」対象になりえたかについては今後の研究を待ちたい。あまりにきっぱりとした直線、しかも問題の 3 語のみ狙い撃ちにこのインクの線。これは無造作にひかれたように見えるいつもの下線の場合とはちがうので、インクの色、太さは矛盾しないが、別人の筆を疑うべきかもしれない。⁶

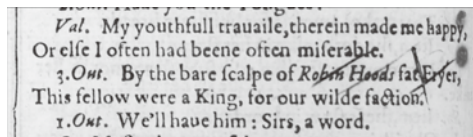


図 4 Sp Coll BD8-b.1, sig. C4v (By permission of University of Glasgow Library, Special Collections 撮影筆者)

(5) 古典への言及を評価

グラスゴー・リーダーだけが下線をしている箇所をみていくと、この読者の

6 山田昭廣氏からはこの書き込みについて、同一人のもので書き込み者の信仰に関係があるのではないかと、との大変興味深い示唆をいただいた。今後の課題としたい。

場合、古典への言及がより評価されているように思われる。いくつもあるなかから、ここでは3か所を取り上げる。ディドーをめぐるやりとりで引かれた下線、

Gon. Not since widdow Dido's time.

Ant. Widow? A pox o'that: how came that Widow in? Widdow Dido!

Seb. What if he had said Widdower Æneas too?

Good Lord, how you take it?

Adri. Widdow *Dido* said you? You make me study

(A4r *Temp* TLN750-55)

ターゲットは古典への言及であろう。明星コピーで当該箇所にはなんらの反応も書き込まれていない。ピストルらしい以下の大げさなセリフ、“Or goe thou like Sir Acteon he, with / Ring-wood at thy heeles: O, odious is the name.” (D4v *Wives* TLN 660-61) に下線を引き欄外に“ap:”と書き入れている。明星リーダーはこの箇所には下線は引いていない。もう一カ所は両者ともに注目したことが認められる台詞での違いを取り上げておこう。*The Two Gentlemen of Verona* 3 幕 1 場のヴァレンティンの台詞。4 行からなる台詞の前半に下線（上線）を引く明星リーダーに対し、グラスゴー・リーダーが引くのは後半だ。

Why then a Ladder quaintly made of Cords

To cast vp, with a paire of anchoring hookes,

Would serue to scale another *Hero's* towre,

So bold *Leander* would aduenture it. (C3 *TGV* TLN 1186-89)

Valentine のこのセリフに目をとめているのは両者に共通しているのであるが、ハイライトする行が違っている。明星リーダーはプロットないしはストーリーラインをここでは追っているといえるかもしれない。

(6) ウィットと喜劇性の重視

明星リーダーが道化芝居やドタバタ芝居には熱心な反応を示すことはほとんどないのに対し、グラスゴー・リーダーはそういう箇所もばかばかしがらずに積極的にマーキングをしている。たとえば、ランスの道化芝居中の“now should not the shooe speake a word for weeping.” (C1 TGV TLN 616-17) に下線を施し、“ap:” と書き入れる。明星リーダーは欄外にひと言“foolerie”と記すのみである。同じ芝居のヴァレンティンとスピードのテンポの良いやり取りへの反応にも違いが現れる。

Val. How esteem'st thou me? I account of her beauty.

Speed. You neuer saw her since she was deform'd.

Val. How long hath she beene deform 'd?

Speed. Euer since you lou 'd her. (B6 TGV TLN 455-58)

2行目の恋に目がくらむと相手の真の姿が見えなくなるという教訓により近いセリフは明星リーダーもショートラインではあるが、マーキングをしているし、欄外には、“Louers are blind”と書きつけている。それにもかかわらず、このやりとりは素通りしている。グラスゴー・リーダーの方には、機知にとんだテンポのよいダイアログそのもののに、関心がありそうだ。

(7) 情熱的恋愛

Shakespeare in Love ですっかりおなじみの “What light, is light, if *Silui*a be not feene” (C3v TGV TLN 1239) ではじまるパッセージで、ふたりの読者のマーキングぶりを比べてみよう。(図 5&6) 下線の引かれ具合に、グラスゴー・リーダーのほうのこの台詞に対する熱さが顕著に見て取れよ

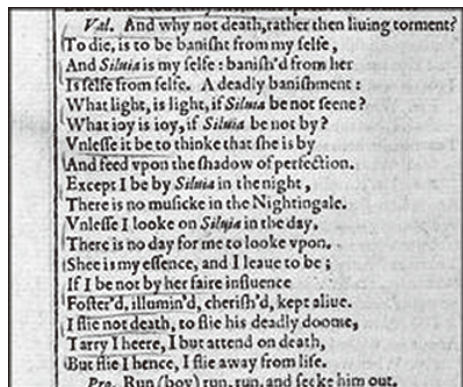


図 5 Mr 774, sig. C4v (明星大学図書館所蔵)

う。もっとも、明星コピーでは欄外の書き込みに“Threats/passionat loue”とあり、情熱的恋を冷静に観察している読者の存在が伝わってくる。⁷

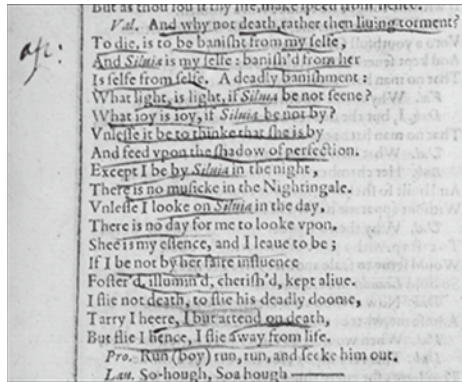


図6 Sp Coll BD8-b.1, sig. C4v
(By permission of University of Glasgow
Library, Special Collections 撮影筆者)

(8) モンスター・キャリバン

トリンキュローやステファノーらからモンスター呼ばわりされるキャリバンのせりふにも明星リーダーにはない下線が引かれている。“ap:”をともない“For I am all the Subjects that you haue, / Which first was min owne King” (A2v *Temp* TLN480-81) や“Thou didst preuent me, I had peopel'd else / This Isle with Calibans” (A3 *Temp* TLN 490-91) に下線を引くこの読者のマーキングは、キャリバンの人物造形を評価したと Nicholas Rowe が作家評伝で言及したルーシアス・ケアリらしいマーキングだとのエマ・スミスの指摘はそのとおりであろう。このようなキャリバン自身の誇り高いせりふだけでなく、彼を“Monster”と呼び続けるトリンキュローやステファノーらのキャリバンとの道化芝居的なやり取りにも丹念に下線が引かれていくあたりは、コミックな道化芝居を評価するグラスゴー・リーダーの特徴の発現と言えるかもしれない。*The Tempest* では妖精のエアリエルのせりふや、妖精を操るプロスペローの演劇そのものと重なっていくマジックを表現する“Our Reuels now are ended: These our actors, / (As I foretold you) were all Spirits, and / Are melted into Ayre, into thin Ayre” (B2 *Temp* TLN 1819-21) といったせりふに

7 この書き込みの比較について、山田昭廣氏はグラスゴー・リーダーも明星リーダーも完全におなじ読者反応である、上線のかわりに縦線でこの台詞すべてをカヴァーしている明星リーダーの方が強いかもしれない、との解釈を示された (private correspondence)。明星リーダーの縦線については、山田 (2013) pp.165-66 等を参照。

すかさず下線が引かれる。このせりふの後に続く、地上のものの移ろいやしさという格言的表現はどちらの読者も共に下線で反応を示しているのだが。さらには、

Gon. I'th name of something holy, Sir, why stand you

In this strange stare?

Al. O, it is monstrous: monstrous:

Me thought the billowes spoke, and told me of it,

The windes did sing it to me: and the Thunder

(That deepe and dreadfull Organ-Pipe) pronounc'd

The name of Prosper: (B1 Temp TLN 1630-36)

のような、ゴンザーローやアロンゾーら貴族たちの語る無人島の不思議の描写にも多数の下線を引いて関心のありかを記録したグラスゴー・リーダーには、明星リーダーに比べて、恐らくは実際の観劇体験が醸成したであろう演劇的想像力がより強く感じられるように思う。

The Two Gentlemen of Verona の書き込み

凡例

転写記録の各項は、まず、書き込みの場所 (Signature, column a or b など場所の詳細、TLN)、下線箇所の台詞話者を示し、そのあとで、下線をひかれたテキストを引用符 (ダブル) で囲んで引用する。下線が複数話者の台詞に跨り、かつひとかたまりのパッセージとして認識されていると判断される場合には、引用に発話者指示 speech prefix を含める。韻文、散文を問わず、フォリオの改行箇所を斜線で示す。すこしでも下線が及んでいると判断する単語には下線を施した。下線以外の書き込みには引用符 (シングル) をつけて記録する。‘ap.’ (I approve の意と考えられる) の場合はそれが指していると思われる下線の記録の最後に記録する。転写は読者の便宜のため幕場 ([1/1] のように表示) ごとに区切って示すことにする。図 7 は Lorenzo Cary の記名のある C5v の全体像である。

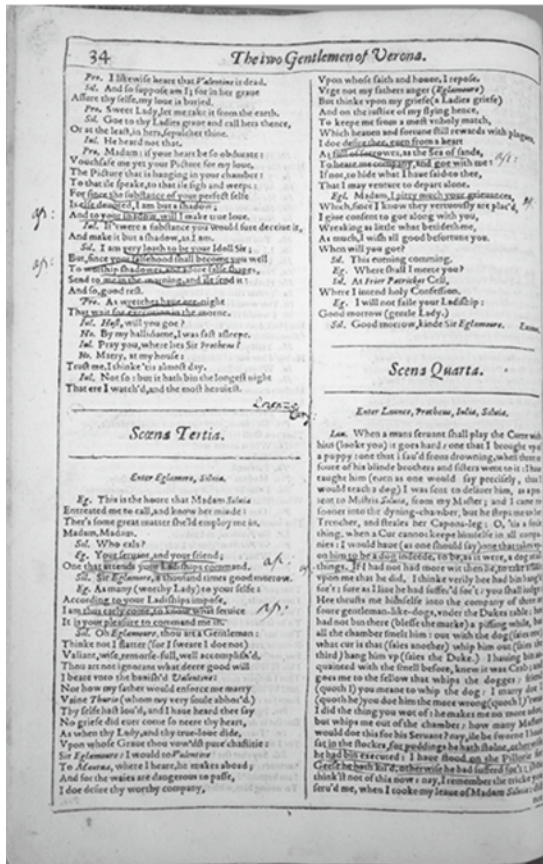


図 7

Sp Coll BD8-b.1, sig. C5v (By permission of University of Glasgow Library, Special Collections 撮影筆者)

The Two Gentlemen of Verona の書き込みの転写

[1.1]

B4v a. 12-13. Valentine. "But since thou lou'st; loue still, and thriue therein,

Euen as I would, when I to loue begin." 'ap.'

B4v a. 14-22. "Pro. Wilt thou be gone? Sweet *Valentine* adew, /Thinke on thy

Protheus, when thou (hap'ly) seest/ Some rare note-worthy obiect in thy

trauaile./ Wish me partaker in thy happinesse./ When thou do'st meet good hap; and in thy danger, / (If euer danger doe enuiron thee) /Commend thy grieuance to my holy prayers./ For I will be thy beades-man, Valentine. /Val. And on a loue-booke pray for my successe?" 'ap:'.

B4v a. 33-39. Valentine. "To be in loue; where scorne is bought with grones: / Coy looks, with hart-sore sighes: one fading moments mirth, / With twenty watchfull, weary, tedious nights; / If hap'ly won, perhaps a haplesse gaine; / If lost, why then a grieuous labour won; / How euer: but a folly bought with wit, / Or else a wit, by folly vanquished." 'ap:'.

B4v b. 55-56. Valentine. "But wherefore waste I time to counsaile thee / That art a votary to fond desire?" 'ap:'.

B4v b. 61-62. Valentine. "To Millaine let me heare from thee by Letters / Of thy successe in loue;" 'ap:'.

B4v b. 70-73. Proteus. "Thou Iulia, thou hast metamorphis'd me: / Made me neglect my Studies, loose my time; / Warre with good counsaile; set the world at nought; / Made Wit with musing, weake; hart sick with thought." 'ap:'.

B4v b. 97. Speed. "Such another prooffe will make me cry baâ." 'ap:'.

[1.2]

B5 b. 187. Luciana. "Fire that's closest kept, burnes most of all."

B5 b. 201. Luciana. "To plead for loue, deserues more fee, then hate." 'ap:'.

B5 b. 211-214. Julia. "Fie, fie: how way-ward is this foolish loue; / That (like a testie Babe) will scratch the Nurse, / And presently, all humbled kisse the Rod? / How churlishly, I chid Lucetta hence, / When willingly, I would haue had her here? / How angerly I taught my brow to frowne, / When inward ioy enforc'd my heart to smile?" 'ap:'.

B5v a, b. [no annotations]

[1.3]

B6 a. 380-81. Proteus. "Thus haue I shund the fire, for feare of burning, / And drench'd me in the sea, where I am drown'd." 'ap:'.

B6 a. 386-89. Proteus. "Oh, how this spring of loue resemblth / The vncertaine glory of an Aprill day, / Which now shewes all the beauty of the Sun, / And by

and by a clowd takes all away." 'ap:' .

[2.1]

B6 b. 432-35. Speed. "that these follies are within you, / and shine through you
like the water in an Vrinall: that / not an eye that sees you, but is a Physician
to comment / on your Malady." 'ap:' .

B6 b. 456-58. "Speed. You neuer saw her since she was deform'd. / Val. How
long hath she beene deform'd? / Speed. Euer since you lou'd her."

B6 b. 463-66. Speed. "Because Loue is blinde: O that you had mine / eyes, or
your owne eyes had the lights they were wont / to haue, when you chidde at
Sir *Protheus*, for going vn- / garter'd." 'ap:' .

B6v a. 487. Speed. "Oh excellent motion; oh exceeding Puppet:" 'ap:' .

B6v a. 506-09. Silvia. "A pretty period: well: I ghesse the sequell; / And yet
I will not name it: and yet I care not. / And yet, take this againe: and yet I
thanke you: / Meaning henceforth to trouble you no more." 'me[reading
doubtful]: ap:' .

B6v a. 526-27. Speed. "Oh Iest vnseene: inscrutable: inuisible, / As a nose on a
mans face, or a Wethercocke on a steeple:" 'ap:' .

B6v b. 549. Valentine. "She gaue me none, except an angry word." 'ap:' .

B6v b. 557. Speed. "Or fearing els some messēger, yt might her mind discourer".
'ap:'

B6v b. 558. Speed. "Her self hath taught her Loue himself, to write vnto her
(louer," 'fo[reading doubtful].'

[2.2]

B6v b. 577-80. Proteus. "And when that howre ore-slips me in the day, /
Wherein I sigh not (Iulia) for thy sake, / The next ensuing howre, some foule
mischance / Torment me for my Loues forgetfulnesse:" 'ap:' .

B6v b. 584-86. Proteus. "Iulia, farewell: what, gon without a word? / I, so true
loue should doe: it cannot speake, / For truth hath better deeds, then words to
grace it." 'ap:' .

B6v b. 588-89. Proteus. "Goe: I come, I come: / Alas, this parting strikes poore
Louers dumbe." 'ap:' .

[2.3]

C1 a. 616-17. Launce. “come I to my Father; Father, your blessing: now / should not the shooe speake a word for weeping:” ‘ap:’.

[2.4]

C1 b. 683-84. “*Val.* I know it wel sir, you alwaies end ere you begin. / *Sil.* A fine volly of words, gentlemē, & quickly shot off” . ‘ap:’.

C1 b. 687-91. “*Val.* Your selfe (sweet Lady) for you gaue the fire, / *Sir Thurio* borrowes his wit from your Ladiships lookes, / And spends what he borrowes kindly in your company. / *Thu.* Sir, if you spend word for word with me, I shall / make your wit bankrupt.” ‘me ap:’.

C1 b. 692-93. Valentine. “I know it well sir: you haue an Exchequer of (words, / And I thinke, no other treasure to giue your followers:” ‘ap:’.

C1v a. 725-27. Duke. “Beshrew me sir, but if he make this good / He is as worthy for an Empresse loue, / As meet to be an Emperors Councillor:” . ‘ap:’.

C1v a. 745. Valentine. “Why Lady, Loue hath twenty paire of eyes” .

C1v a. 747-49. “*Val.* To see such Louers, Thurio, as your selfe, / Vpon a homely obiect, Loue can winke. / *Sil.* Haue done, haue done: here comes ye gentleman.” ‘ap:’.

C1v a. 756. Silvia. “Too low a Mistres for so high a seruant.” ‘me:ap:’.

C1v a. 757-58. Proteus. “Not so, sweet Lady, but too meane a seruant / To haue a looke of such a worthy a Mistresse.” ‘wo:see:[reading doubtful]’.

C1v a. 764. Proteus. “Ile die on him that saies so but your selfe.” ‘ap:’.

C1v a. 766. Proteus. “That you are worthlesse.” [continued from the ‘ap:’ above]

C1v a. 777-88. “*Val.* How does your Lady? & how thriues your loue? / *Pro.* My tales of Loue were wont to weary you, / I know you ioy not in a Loue-discourse. / *Val.* I *Protheus*, but that life is alter’d now, / I haue done pennance for contemning Loue, / Whose high emperious thoughts haue punish’d me / With bitter fasts, with penitentiall grones, / With nightly teares, and daily hart-sore sighes, / For in reuenge of my contempt of loue, / Loue hath chas ‘d

sleepe from my enthralled eyes, / And made them watchers of mine owne hearts sorrow. / O gentle Protheus, Loue's a mighty Lord," 'ap:' .

C1v b. 789-94. Valentine. "And hath so humbled me, as I confesse / There is no woe to his correction, / Nor to his Service, no such ioy on earth: / Now, no discourse, except it be of loue: / Now can I breake my fast, dine, sup, and sleepe, / Vpon the very naked name of Loue." [contituned from the 'ap' above.]

C1v b. 797. Valentine. "Euen She; and is she not a heauenly Saint?"

C1v b. 811-18. "Val. And I will help thee to prefer her to: / Shee shall be dignified with this high honour, / To beare my Ladies traine, lest the base earth / Should from her vesture chance to steale a kisse, / And of so great a fauor growing proud, / Disdaine to roote the Sommer-swelling flowre, / And make rough winter euerlastingly. / Pro. Why Valentine, what Bragadisme is this?" 'ap: to: [reading doubtful]' .

C1v b. 824-26. Valentine. "And I as rich in hauing such a Jewell / As twenty Seas, if all their sand were pearle, / The water, Nectar, and the Rocks pure gold." 'ap: to:'

C1v b. 847-50. Proteus. "Euen as one heate, another heate expels, / Or as one naile, by strength driues out another. / So the remembrance of my former Loue / Is by a newer object quite forgotten," 'ap: me:' .

C2 a. 855-57. Proteus. "(That I did loue, for now my loue is thaw'd, / Which like a waxen Image 'gainst a fire / Beares no impression of the thing it was.)" 'ap:p[pr?]o:[reading doubtful]' . 'ap:p[pr?]o:[reading doubtful]'

C2 a. 868-69. Proteus. "If I can checke my erring loue, I will, / If not, to compasse her Ile vse my skill." 'ap: me:'

[2.5]

C2 a. 874-78. Launce. "Forsweare not thy selfe, sweet youth, for I am / not welcome. I reckon this alwaies, that a man is neuer / yndon till hee be hang 'd, nor neuer welcome to a place, / till some certaine shot be paid, and the Hostesse say wel-/ come." 'ap:' .

C2 a. 903-05. Launce. "Aske my dogge, if he say I, it will: if hee say / no, it

will: if hee shake his taile, and say nothing, it / will." 'ap:' .

C2 a. 907-08. Launce. "Thou shalt neuer get such a secret from me, but / by a parable." 'go:/And ap: [reading doubtful]' .

[2.6]

C2 b. 938-39. Proteus. "At first I did adore a twinkling Starre, / But now I worship a celestiall Sunne:" 'ap: pfr: bon:[reading doubtful]' .

C2b. 940-45. Proteus. "Vn-heedfull vowes may heedfully be broken, / And he wants wit, that wants resolu'd will, / To learne his wit, t'exchange the bad for better; / Fie, fie, vnreuerend tongue, to call her bad, / Whose soueraignty so oft thou hast preferd, / With twenty thousand soule-confirming oathes." 'ap: me' .

C2 b. 954-55. Proteus. "And Siluia (witness heauen that made her faire) / Shewes Iulia but a swarthy Ethiopie." 'ap: ib:' .

C2 b. 971-72. Proteus. "Loue lend me wings, to make my purpose swift / As thou hast lent me wit, to plot this drift."

[2.7]

C2v a. 976-77. Julia. "Counsaille, Lucetta, gentle girle assist me, / And eu'n in kinde loue, I doe coniure thee," 'ap: me:' .

C2v a. 978-80. Julia. "Who art the Table wherein all my thoughts / Are visibly Character'd, and engrau'd, / To lesson me, and tell me some good meane" 'ap:' .

C2v a. 984-87. Julia. "A true-deuoted Pilgrime is not weary / To measure Kingdomes with his feeble steps, / Much lesse shall she that hath Loues wings to flie," 'ap:' .

C2v a. 991-95. Julia. "Pitty the dearth that I haue pined in, / By longing for that food so long a time. / Didst thou but know the inly touch of Loue, / Thou wouldst as soone goe kindle fire with snow / As seeke to quench the fire of Loue with words." 'ap:' .

C2v a. 1008-13. Julia. "Then let me goe, and hinder not my course: / Ile be as patient as a gentle streame, / And make a pastime of each weary step, / Till the last step haue brought me to my Loue, / And there Ile rest, as after much

turmoil / A blessed soule doth in *Elizium*.” ‘ap:’.

C2v a. 1022-26. “To be fantastique, may become a youth / Of greater time then I shall shew to be. / *Luc*. What fashion (Madam) shall I make your bree-/ (ches? / *Iul*. That fits as well, as tell me (good my Lord) / What compasse will you weare your Farthingale?” ‘ap:’.

C2v b. 1043-53. *Julia*. “*Iul*. That is the least (*Lucetta*) of my feare: / A thousand oathes, an Ocean of his teares, / And instances of infinite of Loue, / Warrant me welcome to my *Protheus*. / *Luc*. All these are seruants to deceitfull men. / *Iul*. Base men, that vse them to so base effect; / But truer starres did gouerne *Protheus* birth, / His words are bonds, his oathes are oracles, / His loue sincere, his thoughts immaculate, / His teares, pure messengers, sent from his heart, / His heart, as far from fraud, as heauen from earth.” ‘ap:’.

[3.1]

C2v b. 1084. *Proteus*. “Know (worthy Prince) Sir *Valentine* my friend”. ‘ap:p[pr?]o:[reading doubtful]’.

C2v b. 1091-92. *Duke*. “*Protheus*, I thank thee for thine honest care, / Which to requite, command me while I liue.” ‘ap:’.

C3 a. 1110-11. *Proteus*. “For which, the youthfull Louer now is gone, / And this way comes he with it presently.” ‘ap:’.

C3 a. 1137-38. *Duke*. “No, trust me, She is peeuish, sullen, froward, / Prowd, disobedient, stubborne, lacking duty,” ‘ap:’.

C3 a. 1145-48. *Duke*. “I now am full resolu’d to take a wife, / And turne her out, to who will take her in: / Then let her beauty be her wedding dowre: / For me, and my possessions she esteemes not.” ‘ap: me:’.

C3 a. 1150-52. *Duke*. “There is a Lady in *Verona* here / Whom I affect: but she is nice, and coy, / And naught esteemes my aged eloquence.” ‘ap:’.

C3 b. 1162-64. *Valentine*. “A woman sometime scorns what best cōtents her. / Send her another: neuer giue her ore, / For scorne at first, makes after-loue the more.” ‘ap:’.

C3 b. 1173-74. *Valentine*. “That man that hath a tongue, I say is no man, / If with his tongue he cannot win a woman.” ‘foh;foh [reading doubtful] [deleted]’.

C3 b. 1188-89. Valentine. "Would serue to scale another Hero's towre, / So bold Leander would aduenture it." 'ap:' .

C3 b. 1210-19. Duke reading. "My thoughts do harbour with my Siluia nightly, / And slaues they are to me, that send them flying. / Oh, could their Master come, and goe as lightly, / Himselfe would lodge where (senceles) they are lying. / My Herald Thoughts, in thy pure bosome rest-them, / While I (their King) that thither them importune / Doe curse the grace, that with such grace hath blest them, / Because my selfe doe want my seruants fortune. / I curse my selfe, for they are sent by me, / That they should harbour where their Lord should be." 'hec miha / guod dormi/ nova licet in / & vo: one[me?] [reading doubtful as the margin shaved heavily]' . 'ap:' .

C3 b. 1222-25. Duke. "Why Phaeton (for thou art Merops sonne) / Wilt thou aspire to guide the heauenly Car? / And with thy daring folly burne the world? / Wilt thou reach stas, because they shine on thee?" 'ap:' .

C3v a. 1226-29. Duke. "Goe base Intruder, ouer-weening Slaue, / Bestow thy fawning smiles on equall mates, / And thinke my patience, (more then thy desert)? / Is priuiledge for thy departure hence." 'ap:' .

C3v a. 1239-56. Valentine. "And why not death, rather then liuing torment? / To die, is to be banisht from my selfe, / And Siluia is my selfe: banish'd from her / Is selfe from selfe. A deadly banishment:/ What light, is light, if Siluia be not seene? / What ioy is ioy, if Siluia be not by? / Vnlesse it be to thinke that she is by / And feed vpon the shadow of perfection. / Except I be by Siluia in the night, / There is no musicke in the Nightingale./ Vnlesse I looke on Siluia in the day, / There is no day for me to looke vpon. / Shee is my essence, and I leaue to be; / If I be not by her faire influence / Foster'd, illumin'd, cherish'd, kept aliue. / I flie not death, to flie his deadly doome, / Tarry I heere, I but attend on death, / But flie I hence, I flie away from life." 'ap:' .

C3v a. 1291. Proteus. "I, I: and she hath offered to the doome" .

C3v b. 1292-93. Proteus. "(Which vn-reuerst stands in effectuall force) / A Sea of melting pearle, which some call teares;" 'ap:' .

C3v b. 1298-1300. Proteus. "But neither bended knees, pure hands held vp, /

Sad sighes, deepe grones, nor siluer-shedding teares / Could penetrate her vncompassionate Sire;" 'ap:' .

C3v b. 1312. Proteus. "Time is the Nurse, and breeder of all good;" 'ap: m:'

C3v b. 1321-23. Proteus. "Come, Ile conuey thee through the City-gate. / And ere I part with thee, confer at large / Of all that may concerne thy Loue-affaires;" 'ap:' .

C3v b. 1332-36. Launce. "He liues not now / that knowes me to be in loue, yet I am in loue, but a / Teeme of horse shall not plucke that from me: nor who / 'tis I loue: and yet 'tis a woman; but what woman, I / will not tell my selfe;" 'ap:' .

C3v b. 1338-40. Launce. "Shee / hath more qualities then a Water-Spaniell, which is / much in a bare Christian;" 'ap:' .

C4 a. 1359. Launce. "Oh illiterate loyterer; it was the sonne of thy" . 'ap:' .

C4 a. 1362. Launce. "There: and S. Nicholas be thy speed." 'ap:' .

C4 a. 1399-1400. Launce. "Out with that too: / It was Eues legacie, and cannot be t'ane from her." 'ap:' .

C4 a. 1402. Launce. "I care not for that neither: because I loue crusts." 'ap: Sq:[reading doubtful]' .

C4 a. 1415-16. Launce. "Stop there: Ile haue her: she was mine, and not? / mine, twice or thrice in that last Article;" 'ap:' .

[3.2]

C4 b. 1451-53. Duke. "This weake impresse of Loue, is as a figure / Trenched in ice, which with an houres heate / Dissolues to water, and doth loose his forme." 'ap:' .

C4 b. 1465-66. Proteus. "Longer then I proue loyall to your Grace, / Let me not liue, to looke vpon your Grace." 'ap:' .

C4v a. 1496-98. Thurio. "Therefore, as you vnwinde her loue from him; / Least it should rauell, and be good to none, / You must prouide to bottome it on me;" 'ap: / very resauap/ lideful [reading doubtful]' .

C4v a. 1501. Duke. "And Protheus, we dare trust you in this kinde," 'ap:' .

C4v a. 1511-16. "Pro. As much as I can doe, I will effect: / But you sir Thurio, are not sharpe enough: / You must lay Lime, to tangle her desires / By walefull

Sonnets, whose composed Rimes / Should be full fraught with seruiceable
vowes. / Du. I, much is the force of heauen-bred Poesie." 'ap:' .

C4v a. 1517-26. Proteus. "Say that vpon the altar of her beauty / You sacrifice
your teares, your sighes, your heart: / Write till your inke be dry: and with
your teares / Moist it againe: and frame some feeling line, / That may discouer
such integrity: / For Orpheus Lute, was strung with Poets sinewes, / Whose
golden touch could soften steele and stones; / Make Tygers tame, and huge
Leuiathans / Forsake vnsounded deepes, to dance on Sands. / After your dire-
lamenting Elegies," 'ap:' .

C4v a. 1531. Proteus. "This, or else nothing, will inherit her." 'ap:' .

[4.1]

C4v b. 1580. 3 Outlaw. "By the bare scalpe of ~~Robin Hood's~~ fat Fryer," [slashed
out].

C4v b. 1596. 1 Outlaw. "And I, for such like petty crimes as these." 'ap:' .

C4v b. 1609-11. 3 Outlaw. "Say I, and be the captaine of vs all: / We'll doe thee
homage, and be rul'd by thee, / Loue thee, as our Commander, and our King."
'ap:' .

C5 a. 1612. 1 Outlaw. "But if thou scorne our curtesie, thou dyest." 'ap:' .

[4.2]

C5 a. 1636-37. Proteus. "Yet (Spaniel-like) the more she spurnes my loue, / The
more it growes, and fawneth on her still;" 'ap:' .

C5 a. 1644. Proteus. "Sir, but I doe: or else I would be hence." 'ap:' .

C5 a. 1661-69. "Song. Who is Siluia? what is she? / That all our Swaines
commend her? / Holy, faire, and wise is she, / The heauen such grace did lend
her; / that she might admired be. / Is she kinde as she is faire? / For beauty
liues with kindnesse: / Loue doth to her eyes repaire, / To helpe him of his
blindnesse:" 'ap:' .

C5 b. 1670-75. [Song continued]. "And being help'd, inhabits there. / Then to
Siluia, let vs sing, / That Siluia is excelling; / She excels each mortall thing /
Vpon the dull earth dwelling. / To her let vs Garlands bring." 'ap:' .

C5 b. 1722-24. Silvia. "For me (by this pale queene of night I sweare) / I am so

farre from granting thy request, / That I despise thee, for thy wrongfull suite;
‘ap:’.

C5v a. 1746-48. Proteus. “For since the substance of your perfect selfe / Is else deuoted, I am but a shadow; / And to your shadow, will I make true loue.”
‘ap:’.

C5v a. 1751-55. Silvia. “I am very loath to be your Idoll Sir; / But, since your falsehood shall become you well / To worship shadowes, and adore false shapes, / Send to me in the morning, and ile send it: / And so, good rest.” ‘ap:’.

C5v a. 1756-57. Proteus. “As wretches haue ore-night / That wait for execution in the morne.” ‘ap:’

C5v a. 1764 Text Space. ‘Lorenzo / Cary:’.

[4.3]

C5v a. 1772-73. Eglamore. “Your seruant, and your friend; / One that attends your Ladiships command.” ‘ap:’.

C5v a. 1776-78. Eglamore. “According to your Ladiships impose, / I am thus early come, to know what seruice / It is your pleasure to command me in.”
‘ap:’.

C5v b. 1800-02. Silvia. “I doe desire thee, euen from a heart / As full of sorrowes, as the Sea of sands, / To beare me company, and goe with me:” ‘ap:’.

C5v b. 1805. Eglamore. “Madam, I pittie much your grieuances,” ‘ap:’.

[4.5]

C5v b. 1830-32. Launce. “I would haue (as one should say) one that takes vp- / on him to be a dog indeede, to be, as it were, a dog at all / things.” ‘ap:’.

C5v b. 1847-50. Launce. “ile be sworne I haue / sat in the stockes, for puddings he hath stolne, otherwise / he had bin executed: I haue stood on the Pillorie for / Geese he hath kil’d, otherwise he had sufferd fo’t:”

C6 a. 1853-55. Launce. “when did’st / thou see me heaue vp my leg, and make water against a / Gentlewomans farthingale?”

C6 a. 1857-58. Proteus. “Sebastian is thy name: I like thee well, / And will employ thee in some seruice presently.” ‘ap:’.

C6 a. 1900-03. Julia. “She dreames on him, that has forgot her loue, / You doate

on her, that cares not for your loue. / 'Tis pittie Loue, should be so contrary: /
And thinking on it, makes me cry alas." 'ap:'.

C6 b. 1971-75. Julia. "But since she did neglect her looking-glasse, / And threw
her Sun-expelling Masque away, / The ayre hath staru'd the roses in her
cheekes, / And pinch'd the lilly-tincture of her face, / That now she is become
as blacke as I."

C6v a. 1986-91. Julia. "(Madam) 'twas Ariadne, passioning / For Thesus
periury, and vniust flight; / Which I so liuely acted with my teares: / That my
poore Mistris moued therewithall, / Wept bitterly: and would I might be dead,
/ If I in thought felt not her very sorrow." 'ap:'.

C6v a. 2007-09. Julia. "Her haire is Aburne, mine is perfect Yellow; / If that be
all the difference in his loue, / Ile get me such a coulour'd Perrywig:" 'ap:'.

C6v a. 2015-23. Julia. "Come shadow, come, and take this shadow vp, / For ,tis
thy riual: O thou sencelesse forme, / Thou shalt be worship'd, kiss'd, lou'd,
and ador'd; / And were there sence in his Idolatry, / My substance should be
statue in thy stead. / Ile vse thee kindly, for thy Mistris sake / That vs'd me so:
or else by Ioue, I vow, / I should haue scratch'd out your vnseeing eyes, / To
make my Master out of loue with thee." 'ap:'.

[5.1]

[5.2]

C6v b. 2081-82. Duke. "Him he knew well: and guesd that it was she, / But
being mask'd, he was not sure of it." 'ap:'.

[5.3]

[5.4]

D1 a. 2121-31. Valentine. "This shadowy desert, vnfrequented woods / I better
brooke then flourishing peopled Townes: / Here can I sit alone, vn-seene
of any, / And to the Nightingales complaining Notes / Tune my distrestes,
and record my woes. / O thou that dost inhabit in my brest, / Leauē not the
Mansion so long Tenant-lesse, / Lest growing ruinous, the building fall, / And
leauē no memory of what it was, / Repaire me, with thy presence, Siluia: /
Thou gentle Nymph, cherish thy for-lorne swaine." 'ap:'.

D1 a. 2142-24. Proteus. "Vouchsafe me for my meed, but one faire looke: / (A smaller boone then this I cannot beg, / And lesse then this, I am sure you cannot giue.)" 'ap:'.

D1 a. 2148-49. Proteus. "Vnhappy were you (Madam) ere I came: / But by my comming, I haue made you happy." 'ap:'.

D1 a. 2162. Proteus. "Oh 'tis the curse in Loue, and still approu'd". 'ap:'.

D1 b. 2163. Proteus. "When women cannot loue, where they're belou'd." [apparently included in the 'ap:' above].

D1 b. 2170-71. Silvia. "better haue none / Then plurall faith, which is too much by one:" 'ap:'.

D1 b. 2182-83. Valentine. "Ruffian: let goe that rude vnciuill touch, / Thou friend of an ill fashion." 'ap:'.

D1 b. 2190-91. Valentine. "Who should be trusted, when ones right hand / Is periured to the bosome?" 'ap:'.

D1v a. 2232-33. Julia. "It is the lesser blot modesty findes, / Women to change their shapes, then men their minds." 'ap:'.

D1v a. 2235-56. Proteus. "that one error / Fils him with faults: makes him run through all th' sins". [apparently included in the 'ap:' above]

D1v b. 2264-65. Duke. "Now, by the honor of my Ancestry, / I doe applaud thy spirit, Valentine," 'ap:'.

D1v b. 2267-70. Duke. "Know then, I heere forget all former greefes, / Cancell all grudge, repeale thee home againe, / Plead a new state in thy vn-riual'd merit, / To which I thus subscribe: Sir Valentine," 'ap:'.

D1v b. Box above The names of all the Actors box. 'starke naught:'

おわりに

ここまで第2代フォークランド子爵ルーシアス・ケアリである可能性が高いと思われるグラスゴー・リーダーによる書き込みの分析を試み、大まかにその特徴を8つまで抽出し、*The Two Gentlemen of Verona*に残る書き込みの転写を共有してきた。グラスゴー・リーダーの書き込み分析では、明星リー

ダーの書き込みと比較するという方法を試み、確かに両者の間に違いがあること自体は明らかになったと思う。しかしながら、単独で書き込みを読み込む試みももっと必要であろう。ルーシアス・ケアリの筆だとなると、ますます、その必要が痛感されるように思う。

転写作業については、ほぼ終えたとはいえ、英語とラテン語、フランス語を混せて使っているグラスゴー・リーダーの書き込みには、まだ読みを確定できない書き込みが相当数残っている。本書き込みが貴重な文化文学的資料であるのは間違いあるまい。広く研究に活用できるかたちで書き込みの転写を整備・公開していく必要がある。あわせて今後の課題としたい。

謝辞：小論は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））課題番号23520333 および15K02359）に基づく研究成果の一部です。調査対象コピーの所蔵館グラスゴー大学図書館とそのスタッフには調査課題に対する理解をいただき惜しめない協力を賜りました。ここに記して感謝を表したいと思います。

引用文献

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies. 1623.

West 11 (Sp Coll BD8-b.1, Glasgow University Library)

West 201 (MR 774, The Kodama Memorial Library, Meisei University)

“Book of the Month July 2001 Shakespeare: First Folio, London: 1623. Sp Coll BD8-b.1”
<http://special.lib.gla.ac.uk/exhibns/month/july2001.html> (最終閲覧日 2015.10.31)

Bate, Jonathan. *Soul of the Age: A Biography of the Mind of William Shakespeare*. Penguin Books, 2009.

Blanning, Howard. *Havighurst Folios Transcriptions*, Miami University of Ohio (2015).

Farmer, Alan. “‘Whoores subtile shifts’: Commonplacing Women in the Meisei Copy of the Shakespeare First Folio”. Privately circulated among the participants of an SAA workshop “Reading the First Folio Then and Now” led by Jean-Christophe Mayer and Noriko Sumimoto, Vancouver, 2 April 2015.

Gurr, Andrew. *Playgoing in Shakespeare's London*. Third Edition. Cambridge: Cambridge UP, 2004

_____. *The Shakespeare Company, 1594-1642*. Cambridge: Cambridge UP, 2011.

Hooks, Adam G. “Marginalia.” *The Encyclopedia of English Renaissance Literature*. Ed. by Garrett A. Sullivan Jr. et al. Oxford: Wiley-Blackwell, 2012, 636-39.

Kawachi, Yoshiko. *Calendar of English Renaissance Drama 1558-1642*. New York: Garland, 1986.

- Lee, Sidney. *Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies: A Census of Extant Copies*. Oxford: The Clarendon P. 1902.
- Maclean, Robert. "Falkland's First Folio?" <https://universityofglasgowlibrary.wordpress.com/2012/04/03/falklands-first-folio/> (最終閲覧日 2015.10.31)
- Meisei University Shakespeare Collection Database. <<http://shakes.meisei-u.ac.jp/>> Updated 31 Mar. 2008)
- Pearson, David. *Books as History: The importance of books beyond their texts*. Revised ed. London: The British Library, 2012.
- Rasmussen, Eric. *The Shakespeare Thefts: In Search of the First Folios*. Palgrave Macmillan, 2011.
- Rasmussen, Eric and Anthony James West, eds. *The Shakespeare First Folios: A Descriptive Catalogue*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2012.
- Smith, David L. "Cary, Lucius, second Viscount Falkland". Collin Mathew et al eds. *Oxford Dictionary of National Biography*. Vol. 23. Oxford: Oxford UP, 2004, 440-45.
- Smith, Emma. *Shakespeare's First Folio: Four Centuries of an Iconic Book*. Oxford: Oxford UP, 2016 (forthcoming).
- West, Anthony James. *The Shakespeare First Folio: The History of the Book. Volume II: A New Worldwide Census of First Folios*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Yamada, Akihiro, ed. *The First Folio of Shakespeare: A Transcript of Contemporary Marginalia in a Copy of the Kodama Memorial Library of Meisei University*. Tokyo: Yushodo P., 1998.
- 山田昭廣、『シェイクスピア時代の読者と観客』、名古屋大学出版会、2013年。
- 住本規子、「読者から読者へ——書物のもうひとつの役割とグラスゴー大学所蔵ファースト・フォリオの書き込み」、『明星国際コミュニケーション研究』第7号（2015）、29-51。